

國學院大學學術情報リポジトリ

中古和文における連体力疑問文：
連体ナリ文との対応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 中古和文, 肯否疑問文, 連体力, 連体ナリ, 事情文 キーワード (En): 作成者: 藤原, 慧悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001706

中古和文における連体カ疑問文 ——連体ナリ文との対応——

藤原 慧悟

キーワード：中古和文、肯否疑問文、連体カ、連体ナリ、事情文

1 本稿の目的

中古和文における肯否疑問文の文型には、文中にヤを用いる文型、文末にヤを用いる文型、文末にカを用いる文型がある。(1)～(3)にそれぞれの例を示す。(3)aはカが体言に後接した文型、(3)bはカが活用語連体形に後接した文型である。

- (1) 「道定朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」, 「さなむはべる」と申す。
(源氏物語・浮舟、⑥176)
- (2) 「東の御方は物詣したまひにきとか。このおはせし人は、なほものしたまふや」など問ひたまふ。
(源氏物語・手習、⑥334)
- (3) a 「こは宮の御消息か」とゐなほりて、 (源氏物語・夕霧、④401)
b 「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、
(源氏物語・若紫、①20)

各文型の意味については、岡崎正継(1996：第六章)が引用述語と応答の表現に注目した特徴付けを行なっている。たとえば、(1)は「存在全体質問」、(2)は「述語確認質問」、(3)は「断定全体質問」をそれぞれ表すのが特徴であるとしている。しかし、「断定全体質問」を表すのが特徴とされている(3)については、ナリを用いた文との関係が示唆されていながら十分には検討されてはいない。そこで本稿では、特に(3)bのような活用語連体形にカが後接した疑問文(以下、連体カ疑問文)を取り上げて、活用語連体形にナリが後接した文(以下、連体ナリ文)との対応を検討する。

2 先行研究

2.1 連体力疑問文について

まず、本稿の対象である連体力疑問文を含む、「～カ」に関する先行研究を概観する。

岡崎正継（1968）は、今昔物語集本朝世俗部の疑問文を引用述語に注目して調査して、疑問文の文型を「疑い」を表すものと「問い」を表すものとに整理している。「～カ」については、「ト疑フ」「ト恠シク思フ」「ト不審シク思フ」などで引用された例がない一方、「ト問フ」で引用された例が17例あることから、「心理描写の文では「自問」を表はし、会話文では「他問」を表はす型である」と述べている^{注1}。（4）は会話文における「他問」の例、（5）は心内文における「自問」の例である。

（4）「……。然テ、生贄ヲバ人造テ神ニハ備フルカ」ト問ヘバ、妻、「然ニハ非ズ。……」トイヘバ、
(今昔物語集・26- 8、③505)

（5）『互ニ切テ死タルカ』ト思テ吉ク見レバ、
(今昔物語集・23-15、③203)

さらに、岡崎正継（1996：第六章）は、引用述語に加えて応答の表現に注目することで、疑問文の文型を意味的に特徴付けている。「～カ」は、（4）における「然ニハ非ズ」のようにナリを用いて応答する例が目立つことから、「断定全体質問（カの前の文全体について、断定的に訊く質問）」を表すとされている。「断定的に訊く」の具体的な内容が示されていないが、「～ナリ」との関係を示唆している点が注目される。岡崎氏は今昔物語集を中心に例を挙げているため、本稿の考察の対象である中古和文から類例を示す。（6）は「他問」の例、（7）は「自問」の例で、どちらもナリを用いて質問に応答したり疑念を解消したりしている。

（6）この男の伴なる人を呼ばせて、（女房→供人）「この、のぞきたまへる人は、この、南に宿りたまへるか」と問ふ。（供人→女房）「さなり」
(平中物語、526)

（7）火かと思へど、さにはあらず。
(紫式部日記、185)

応答の表現以外に注目する研究もある。近藤要司（1998）は、源氏物語における「～カ」が（8）や（9）のような「対象事態へ適用する説明解釈の適否」に関する疑問文としての使用に偏ると論じている。

（8）（尼君→若紫）「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君
の見上げたるに、（源氏物語・若紫、①206）

（9）さすがに心細ければ、（末摘花）思し忘れぬるかところみに、「……」
と聞こえたり。（源氏物語・夕顔、①189）

（8）は、若紫が顔を擦って赤くしていることの説明あるいは解釈として「童べと腹立ちたまへる」が適当か否かを問題にしている。また（9）は、源氏が消息を送ってこないことの説明あるいは解釈として「思し忘れぬる」が適当か否かを問題にしている。近藤氏は「～カ」と「～ナリ」との関係に言及していないが、「～カ」に対する「説明解釈」という表現は、連体ナリ研究における「説明」（田島光平1964）や「解釈」（野村剛史2015）などの表現と重なる。

ところで、ナリは単独で（助動詞を後接せずに）は疑問文の主節に用いられにくいことが知られている^{注2}。1節で示した中古和文における肯否疑問文の文型に照らせば、「～ナリ」に直接対応する疑問文としては「～ヤ～ナル」「～ナリヤ」「～ナルカ」が想定される。しかし、ナリはや・カの結びにならないこと、カを後接しないことが指摘されている（高山善行2002：189）。実際に「～ヤ～体言／連体ナル」および「体言／連体ナルカ」の例は見られない。また、「～ナリヤ」は詠嘆の例がほとんどで、疑問文としては用いられにくいことも指摘されている（岡崎正継1996：107-109）。本稿の調査範囲において、疑問文と解釈される「～ナリヤ」は3例しかない。（10）（11）は「体言ナリヤハ」の形で反語の例である。また、（12）は「連体ナリヤ」の形で反語ではないが院政期の例である。

（10）かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな、ともののをりごと

には思し出づ。 (源氏物語・末摘花、①297)

- (11) よきをりと思ひて、やをら御帳の東面の御座の端に据ゑつ。さまでもあるべきことなりやは。 (源氏物語・若葉下、④223)

- (12) かたはらに居られたりしなりや、まこと、忘れはべりにけり。
(大鏡、362)

つまり、「～ナリ」に対応する疑問文は、単独のナリでは表現されないのである。「～カ」が「～ナリ」に対応すれば、その空所を補うことになる。

さて、「～カ」に関する先行研究は「～ナリ」との対応を示唆してはいるが、その詳細な検討に及んでいない。「～カ」への理解を深めるためには、「～ナリ」との対応を明らかにすることが必要である。また、連体ナリについては多くの先行研究がある。そこで、連体ナリ文の先行研究を踏まえて、連体カ疑問文の分析に有効な観点を探りたい。

2.2 連体ナリ文について

連体ナリの意味的研究の嚆矢と言える田島光平（1964）は、「平安時代初期の連体形承接の「なり」は、その連体形が体言的に用いられる場合を除いては、根拠をもって（明示または暗示）相手（聞き手または読者）に説明する場合に用いられる辞であった」と述べている。(13) (14) が「明示」の例、(15) が「暗示」の例である。

- (13) 雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。 (竹取物語、47)

- (14) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。
(土佐日記、15)

(15) かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。(竹取物語、49)
また、田島氏は、(13) (14) のような表現から、(16) (17) のような「根拠と事実を逆に置くことによって、根拠を直接に述べる「——（すれ）ばなり」などの形式が現れた」とも述べている。

- (16) みやこへと思ふをものかなしきのかへらぬ人のあればなりけり
(土佐日記、18)

(17) この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。(土佐日記、22)

田島氏が「説明」を表すと述べて以降、連体ナリと現代語のノダとの共通点が強調されることが多いが、野村剛史(2015)はむしろ連体ナリとの差異に注目している。野村氏は、現代語のノダ文研究を踏まえて、源氏物語における連体ナリ文は「現代ノダ文と異なり、二事態にわたる「結果(事実)―原因(事情)」型の事情文はほとんど存在しない。一事態に対する「解釈―再解釈」という構造が保たれている」と述べて、「洪水になったのは、上流で大雨が降ったのだ」のような時間的に離れた事態が連体ナリ文で結ばれるケースが見出しにくいことを指摘している。

野村氏によれば、源氏物語における連体ナリ文は「一事態に対する「解釈(事実)―再解釈(事情)」に由来する事情文が中心的位置を占めている」という。一事態に対する事情文とは(18)のような表現である(二重線部が「解釈(事実)」、一重線部が「再解釈(事情)」)。

(18) 思しめしやりつつ、灯火を挑げ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。

(源氏物語・桐壺、①36)

「丑の刻」というただ一つのシーンがある側面から「右近の司の宿直奏の声聞こゆる」と解釈し、さらに別の側面から「丑になりぬる」と再解釈している、と理解するわけである。田島氏が根拠を明示する例として挙げている(19)(20)は、野村氏の論では「根拠」を含む全体が事実との重複を含んだ再解釈として把握される。

(19) 雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。(竹取物語、47、(13)の再掲)

(20) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

(土佐日記、15、(14)の再掲)

(19)の「ある」が「雷さへ頂に落ちかかるやうなる」を意味して内容的に事実と重複しているのも、連体ナリ文の「一事態性」が背景にある。(20)も、あえて重複させて表現すれば、「日記といふものをするは、男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」のようになる。どちらも(18)

と同じく一事態に対する事情文と考えられ、内容的に重複するからこそ事情部分が「ある」に置き換えられたり、事実部分が省略されたりするのである。

さらに野村氏は、文脈上の事実との関係が明確でなく事情だけを示す場合もあることを指摘して、これを「純然事情文」と名付けている^{注3}。

- (21) 「……、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく
思うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」とて、

(源氏物語・帚木、①102)

- (22) 命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりけると、あはれに見たてまつる。
御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍び
やかに、心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語
せさせたまふなりけり。

(源氏物語・帚木、①33)

(21) (22) は、事情に対応する事実が前後の文脈に現れていないが、目前の状況に対して事情文を用いて、結果的にナリ文によって状況を描写している。

野村氏が指摘した連体ナリ文の「一事態性」は、田島光平（1964）が用いた「説明」という表現では見過ごされていた特徴である。また、連体カ疑問文と連体形ナリ文との対応を考える際の観点としても有効であると考えられる。そこで本稿では、近藤要司（1998）と野村剛史（2015）が対象とする源氏物語から調査の範囲を広げ、「一事態性」に注目して中古和文における連体カ疑問文を観察し、連体ナリ文との対応関係を検討する。

3 調査資料

本稿の主な資料は、国立国語研究所『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』（バージョン2023.03）所収の16作品（竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記）である。

コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて活用語連体形に後接するカを検索し、疑問でない例や補充疑問文・選択疑問文に用いられた例を除いた結果、120例を得た。

4 事情文における連体ナリ文との対応

本節では、連体カ疑問文による事情文の用例を観察し、連体カ疑問文の「一事態性」を確認する。まず、(23)～(25)のような「[事実句]ハ[事情句]カ」の文型である。

(23) かくて、まことに、この男、ものへいなむと思ひたる気色を見て、親、明暮れ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかにいなむといふは、親をいとふか。なほ、この正月の司召をだに待て」と、せちにのたまふ。(平中物語、455)

(24) 返りごとを見れば、(兼家→道綱母)「一夜の心ばへよりは、心よわげに見ゆるは、行ひよわりにけるかと思ふにも、あはれになむ」などぞある。(蜻蛉日記、244)

(25) (叔母→あこぎ)「……、物の具、餅など召すは、御婿どりしたまひて、三日のまうけしたまふか。……」と頼もしげにはべり。(落窪物語、57)

(23)の「親をいとふ」は男の発言の事情、(24)の「行ひよわりにける」は道綱母の様子事情である。(25)は、「道具や餅を求めている」ということを「結婚の儀礼の準備をしている」とことと捉え直している。(23)～(25)は、いずれも事実句と事情句との間に時間的な重なりがある。「[事実句]ハ[事情句]カ」に準ずるものとして、(26)(27)のように、「[事実句]ハ[事情句]カ」の主述が倒置された例もある。

(26) わが供の人、わづかに、「あふ、立ちのきて」など言ふめれば、(下人)「例もゆききの人、寄るところとは知りたまはぬか。咎めたまふは」など言ふを見るこちは、いかがはある。(蜻蛉日記、205)

(27) (中納言)「この家には、むげに人はなかりつるか。かく寝る所まで入りたちて、うちわり、引き放ちつらむを、とがめざりつらむは」と腹立ちて、(落窪物語、138)

(26)も(27)も、言動の事情を問うことで相手を非難していて、事実句と事情句との間に時間的な重なりが認められる。(28)(29)のように指示語を

主語とするもの、(30) (31) のように事実を含むモノ名詞句を主語とするもの、「[事実句] ハ [事情句] カ」のバリエーションである。

- (28) (中将→少将の尼)「かかる所にながめたまふらん心の中のあはれに、おほかたのありさまなども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなしたまふめるこそ。それももの懲りしたまへるか。なほ、いかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、
(源氏物語・手習、⑥329)

- (29) (東宮→道長)「この位去りて、ただ心やすくてあらなむとなむ思ひはべる」と聞こえさせたまひければ、(道長→東宮)「さらにさらにうけたまはらじ。さは、三条院の御末は絶えねと思し召し、おきてさせたまふか。……」と啓したまふに、
(大鏡、124)

- (30) 浦ちかく降りくる雪は白波の末の松山越すかとぞ見る
(古今和歌集326)

- (31) 思ふ人見しも聞きしもあまたありておぼめく声はありと知らぬか
(堤中納言物語・はなだの女御、479)

(28) は浮舟の振る舞いを、(29) は東宮の発言を指示語が受けている。また、(30) は「雪の浦ちかく降りくるは」、(31) は「おぼめく声のするは」のようにコト準体句への置き換えが可能である。いずれの例も事実句と事情句とが時間的に重なっている。

次に、「[事実句] ヲ [事情句] カト」の文型である。これらは「[事実句] ハ [事情句] カト」の文型に置き換えることができる。

- (32) (中納言→大夫の君)「……。隠れたまひけむ御なごりには、阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを。……」とて、
(源氏物語・紅梅、⑤48)

- (33) (薫→中宮)「……」と啓したまふを、すきばみたる気色あるかとは、思しかけざりけり。
(源氏物語・蜻蛉、⑥255)

- (34) ……、心と投げやりたるこそ、やさしきものから、あまり女にはあらぬかと見ゆれ。
(紫式部日記、179)

- (35) さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかとぞ見る

(土佐日記、53)

たとえば(32)は「阿難が光放つは、二たび出でたまへるか」のように置き換えられる。(35)は、事実を含むモノ名詞句が事実句で、「さざれ波のあやのやうに寄するは、青柳の影の糸して織るか」のように置き換えられる。典型的な主述構造ではないが、意味的な主述関係が認められ、事実句と事情句とが時間的に重なっていることは変わらない。

また、原因・理由句を伴う例は、連体ナリ文と同じく、「～バ～カ」の全体が事情であると考えられる。

(36) 白山にあへば光の失するかとはちを捨てても頼まるかな

(竹取物語、26)

(37) 水まさりうらもなぎさのころなれば千鳥の跡をふみはまどふか

(蜻蛉日記、125)

(38) あこぎ格子を上げらるる音を聞きて、いかならむとおどろき惑ひて、起くれば、帯刀さらに起こさず。……、(帯刀→あこぎ)「犬ならむ、鼠ならむを、おどろきたまふぞ」と言へば、(あこぎ→帯刀)「なでふことぞ。したるやうのあれば言ふか」と言へば、(落窪物語、39)

たとえば(36)の事実句を重複させて「～ハ～カ」の構造にすれば、「光の失するは、白山にあへば光の失するか」のようになる。

ここまで、「～ハ～カ」の構造およびそれに置き換えることができる構造を取り上げた。しかし、実際には、事実が前後文脈や状況から想定される(39)(40)のような例の方が多い。

(39) 夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、(伊周→清少納言)「下るるか。

いで、送らむ」とのたまへば、(枕草子、447)

(40) いとうつくしう、ただ今から気高くきよなる御さまを、ことなるしつらひなき舟にのせて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおほえける。幼き心地に母君を忘れず、をりをりに、「母の御もとへ行くか」と問ひたまふにつけて、(源氏物語・玉鬘、③89)

(39)は「人を呼ぶは、下るるか」、(40)は「舟にて行くは、母の御もとへ行くか」のように表現できる。事実は表現されていないが、文脈や状況から

想定される事実と連体カ疑問文で表現される事情との時間的な重なりが認められる。直前に補充疑問文を伴う表現も目立つ。(41) (42) は直前の補充疑問文に事実句が含まれている。

- (41) (女童たち)「直衣着たる人のおはする。宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出でたまひて、「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声、いとらうたし。

(源氏物語・若紫、①242)

- (42) 「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者語らひて、率て来たるか」と問ひたまへば、 (源氏物語・玉鬘、③120)

(41) は「直衣着たる人のおはするは、宮のおはするか」、(42) は「人を尋ね出でたるは、尊き修行者語らひて、率て来たるか」のようにも表現できて、どちらも一事態に対する事情文である。特に(41)は、前文脈に連体ナリ文「宮のおはしますなめり」があって、連体ナリ文と連体カ疑問文との対応が看取できる。

以上、本節では、事情文としての連体カ疑問文を観察して、連体ナリ文と同様に「一事態性」が見られることを確認した。

5 非事情文における連体ナリ文との対応

前節では事情文の連体カ疑問文を観察して、連体ナリ文と同様の「一事態性」が見られることを確認した。連体カ疑問文は事情文に偏るが、事情文でなくても連体ナリ文との対応がある場合がある。本節では、非事情文における連体ナリとの対応を確認する。

まず、連体形部分がモノ準体句を構成し、全体が名詞述語文に相当する場合である。連体ナリ文には、連体部分がモノ準体句を述語を構成している例が見られる。

- (43) かく言ふは播磨守の子の、藏人より今年かうぶり得たるなりけり。

(源氏物語・若紫、①204)

(43) は「播磨守の子で、藏人から今年五位に叙せられた子であった」の意である。連体カ疑問文にも(44)～(46)のような例がある。

(44) (道綱母→兼家)「あなしかまし。御子ぞかし」と言ふに、驚きて、
「いかにいかに。いづれぞ」とあれど、とみに言はねば、「もし、さ
さのところにありと聞きしか」とあれば、「さなめり」とものするに、
(蜻蛉日記、96)

(45) 「この、のぞきたまへる人は、この、南に宿りたまへるか」と問ふ。
「さなり」「さて、その人ぞ」など問へば、この男の名をぞ答へける。
(平中物語、526)

(46) 西の方に例ならぬ童の見えけるを、今参りたるかなど思してさしの
ぞきたまふ。
(源氏物語・東屋、⑥60)

(44) は「しらかのところで産まれたと聞いた子か」、(45) は「この南
隣にお泊りの人か」、(46) は「新参の女童か」の意で、モノ準体句が述語で
あると解釈できる。また、(47) は、「年に一度逢う（＝一度しか逢わない）
のは「逢う」か」の意と解釈される。

(47) 契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは
(古今和歌集92)

「逢ふ」はモノ準体句ではなく、鈴木泰（2009：236）の「辞書的意味」や仁
科明（2014）の「動きの名札」に相当する用法である。あるいは連体形でな
いかもしれないが、文全体が名詞文相当であることには変わりがない。

次に、「ベキカ」の場合である。野村剛史（2015）は、(48) のような「ベ
キナリ」を「ものごとの属性」「ものごとの本質」を表す非事情文としている。

(48) されど、かしこしとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきな
らねば、上は下に輔けられ、下は上に靡きて、事ひろきにゆつろふ
らむ。
(源氏物語・帚木、①63)

(48) は対応する事実・状況が想定できず、「世の中」の本質あるいは属性を
表す非事情文と解釈される。「ベキナリ」と同様に、「ベキカ」にも事情文と
は考えにくい例が存する。

(49) あはれに、忘るまじきさまにのみ語らふれど、人の心はそれにし
たがふべきかはと思へば、ただひとへに悲しう心細きことをのみ思
ふ。
(蜻蛉日記、96)

(50) 道心なからむ人は、後の世までも知るべきかはな。 (大鏡、305)
(49) は「人の心」の、(50)「道心なからむ人」の本質あるいは属性を表している。これらは事情文とは考えられないが、(48)のような連体ナリ文と対応している。

以上のように、連体カ疑問文の中心的用法である事情文以外でも、連体ナリ文と連体カ疑問文との間の対応関係が確認されるのである。

6 連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文

4節および5節では、連体カ疑問文のうち、連体ナリ文との対応が見られる例を取り上げた。本節では連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文について述べるが、そのような例はまれである。

近藤要司(1998)において、「眼前の事態の成立そのことを問題としている」ととれるもの」で、「一面「対象事態への説明解釈の提示」ととれなくもないが、「事態成立そのことの如何」を問題としている」とされる例は源氏物語中に4例のみであり、次の2例が挙げられている。

(51) (空蟬→小君)「……。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されどけ遠かりけり」と言ふ。(源氏物語・帚木、①97)

(52) (源氏→小君)「紀伊守の姉妹もこなたにあるか。我にかいま見せさせよ」とのたまへど、

(源氏物語・空蟬、①123、麥生本・阿里莫本「こなたにか」)

(51) については近藤氏が「「小君が声をかけてきた」という事態への説明解釈の提示ともとれなくはないが」と述べるように全体的な傾向に合致する解釈が可能なので、本稿では事情文と考えたい。また、(52)は、単に紀伊守の妹が近くにいるかどうかを訊く疑問文とも解釈できるが、実際は近くにいることを知りながらとぼけて言ったのであり、そのことが連体カ疑問文の使用と関係している可能性がある^{注4}。残る2例を特定することはできず、源氏物語において確実に連体ナリに対応しないと考えられる例は見いだせなかった。(53)は左馬頭が自身の夫婦観について中将に同意を求める場面で、単純に「そうであるか、そうでないか」を問題にしているとも解釈でき

る^{注5}が、聞き手の態度に対する事情文と解釈することもできる。

- (53) (左馬頭→中将)「……。繫がぬ舟の泛きたる例もげにあやなし。さははべらぬか」と言へば、中将うなづく。

(源氏物語・帚木、①68、国冬本「さは侍らぬことかな」)

近藤要司(1998)の指摘の通り、源氏物語における連体カ疑問文のほとんどは事情文として用いられている。この傾向は他の作品にも当てはまり、注釈書が述語の正否を問題にしているかのように現代語訳している例でも、ほとんどは事情文としての解釈が可能である。(54)は、覗き見をしている乳母たちを見つけた道長の発話で、『新編日本古典文学全集』では「宮様方を拝み申したかな」と現代語訳されている。

- (54) (道長→乳母)「あないみじ。宮仕へに宿世の尽くる日なりけり」と、
生ける心地もせで、三人ながらさぶらひたまひけるほどに、(道長→乳母)「宮たち見たてまつりつるか。いかがおはしましつる。この老法師の女たちには、けしうはあらずおはしまさふな。なあなづられそよ」と、うち笑みて仰せられかけて、(大鏡、360)

しかし、「三人ながらさぶらひたまひけるほどに～仰せかけられて」とあるから、「乳母たちが怯えて立っている」という事実について「宮たちを拝見したのか」と訊いた事情文と解釈するのが適当であり、傾向にも適う。また、『新編日本古典文学全集』は、(55)を「いま吹くかいま目を覚させるかと聞けばよかった」と現代語訳していて、「『今よりぞおどろかすか』と聞くべかりける」という構造を考えているようである。

- (55) 荻風は吹かば寝も寝で今よりぞおどろかすかと聞くべかりける

(和泉式部日記42)

しかし、「～ぞ～か」という疑問文は考えにくいので、「今よりぞ『おどろかすか』と聞くべかりける」と読んで、「荻風が吹いたら、すぐに『(荻風が吹いているのは)、私を起こしているのか』と訊くべきだった」の意の事情文と解釈する方がよい。

以上のように、連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文はまれである。しかし、まったく例がないわけではない。(56)～(59)は事態の成立そのもの

を問題にすると解釈される^{注6}。

- (56) 殿より、使ひまなく賜はせて、「子安の貝取りたるか」と問はせた
まふ。 (竹取物語、51)

- (57) (中宮→清少納言)「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。え着ぬこそく
ちをしけれ。今は紅梅のは着でもありぬべしかし。されど萌黄など
のにくければ。紅に合はぬか」などのたまはすれど、ただいとぞめ
でたく見えさたまふ。

(枕草子、200、能因本・前田本「あはぬなり」)

- (58) 若き人々出で来て、(女房→物乞い)「男やある」、「子やある」、「い
づくにか住む」など、口々問ふに、をかしごと、そへごとなどをす
れば、(女房→物乞い)「歌はうたふや。舞などはするか」と問ひも
果てぬに、 (枕草子、152)

- (59) 「大臣はあるか」と問はせたまへば、大殿、入らせたまひて、さぶ
らふよし申したまへば、「御幸はなりぬるか」と問はせたまへば、「し
か。なりさぶらひぬ」と申させたまへば、 (讃岐典侍日記、395)

(56) は単に子安の貝を取ったか否かを問題にしている。(57) の「紅に合わぬか」も、自身の様子に対する再解釈を清少納言に問うている、あるいは自問していると考えるのは無理がある。ただし、「合はぬなり」の異文があり、そちらを採れば紅色の衣を嫌がっている自身の様子に対する再解釈を説明的に提示した表現と考えられる。また、(58) は「～や」と並置されて述語の正否を問題にしているし、(59) の2例も応答の表現から述語の正否を問題にしていると解釈される。以上の例は「～ナリ」との対応が見られず、これらに対して「～ナリ」で回答すること、たとえば(56) に対して「さなり」「取りたるなり」のように回答することは難しいと思われる。

また、(60) (61) のように「とすれば」「と見れば」で引用されて、続く事態との即時的な継起関係を表す例^{注7}も、連体ナリ文との対応が見出し難い。

- (60) 夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴くひと声にあくるしのめ
(古今和歌集156)

- (61) 暮るるかと見れば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴く山郭公

(古今和歌集157)

(60) は「横になったかと思うと明ける」の意、(61) は「暮れたかを見ると明けた」の意と解釈される。(61) は「暗くなったのは日が暮れたのかと思うと」のように解釈できなくはないが、(60) はなんらかの状況と結び付けることができない。同様に即時的継起関係を表す平叙文には (62) ～ (64) のようにナリが現れず、やはり (60) (61) のような「～かとすれば／見れば」と連体ナリ文との対応は見出し難い。

(62) 絶えぬると見れば逢ひぬる白雲のいとおほよそに思はずも哉

(後撰和歌集861、『新日本古典文学大系』)

(63) かくめりと見れば絶えぬるささがにの糸ゆゑ風のつらくもあるかな

(蜻蛉日記、372)

(64) いほりさす檣の木かげにもる月のくもとみれば時雨ふるなり

(詞花和歌集150、『新日本古典文学大系』)

(60) ～ (64) は和歌における特殊な表現とも思われるが、中世になると散文でも (65) (66) のように用いられている。

(65) 其ノ河ハ出ルカトスレバ疾ク水落ル河ニテ、

(今昔物語集・26- 3、③466)

(66) 公長うしろへ寄るかと思へしかば、頸はまへにぞ落ちにける。

(平家物語・大臣殿被斬、②426)

「～かとすれば／見れば」の類については、和歌も含めた通時的な調査を行ない、その連体ナリ疑問文における位置付けと歴史的な展開を明らかにすることが課題となる。

なお、(67) は本文に問題があると考えられる。中將が自分の愛情の深さを示す場面で、『新編日本古典文学全集』は「誠意があるかないかはわかりになるでしょう」と現代語訳しているが、間接疑問文とは考え難い。

(67) (中將→女君)「『思ひきこゆ』と聞こえよこそ『危し』とものたまはめ、『ただつらき目見せたてまつらじ』と聞こゆれば、志のあるかは」など聞こえたまふ。

(落窪物語、194)

直訳すれば「愛情がある(の)か」となるが、疑問でも反語でも不自然であ

る。『日本古典文学大系』（底本＝寛政六年刊木活字本）などの「志のありかは」の方が解しやすい。また、(68)は、「ムカ」の例である。

- (68) (乳母)「誰かはただ今、『去りたまへ』『捨てたまへ』と聞こゆる」(帯刀)「さて、さにはあらずや。めあはせたてまつりたまはば」(乳母)「いで、あなかしがまし。取り出でても、さまあしからむか。などかおどろおどろしうは言ふべからむは。かたへは妻を思ふなめり」
(落窪物語、193)

(68)は帯刀と乳母が口論する場面で、「(少将と姫君の離縁を)口に出しても体裁が悪いのか」の意と解釈されている。解釈上は相手の言動・態度に対する事情文と考えられるが、ムはナリに前接しないため、承接の観点で「～ナリ」と対応しない。

以上のように例外は存するが、連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文はまれであると言ってよい。

7 本稿の結論

本稿では、中古和文における連体カ疑問文について、先行研究が示唆する連体ナリ文との対応関係を具体的に確認した。その結果、連体カ疑問文は、連体ナリ文と同じく、一事態に対する事情文として用いられることが多いことを明らかにした。また、名詞文相当の疑問文および「～ベキカ」にも連体ナリ文との対応が見られること、連体ナリ文と対応しない連体カ疑問文の例が少数ながら見られることを指摘した。

ところで、連体カ疑問文は事情文に偏るが、連体カ疑問文だけが事情文であるというわけではない。たとえば、(69)(70)の「～や～連体形」は事情文と解釈される。

- (69) 夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき
(古今和歌集562)
- (70) 「など、ここのさまも、見様も例ならぬ。もし我なかりつるほどに、事やありつる」とのたまへば、
(落窪物語、71)

(69)は「光を見ないから、あの人が冷淡なのか」の意で、相手が冷淡なこ

とに対する事情文と解釈される。また、(70)は「もしかして、私がいなかった間に何かがあったのか」の意で、部屋と姫君の状態がいつもと違っていることに対する事情文と解釈される。「～ヤ～連体形」についても事情文という観点での分析が必要である。また、「～カ」と「疑問詞～ゾ」の対応も先行研究で指摘されていて（磯部佳宏1992・岡崎正継1996）、(71) (72)のようになら置されている例もある。

(71) (大将→越前守)「……。 など、いとここがちには見ゆるぞ。豪家とわづらはしがりてあるか」とうち笑ひたまへば、守、「さらにさも侍らず。……」 (落窪物語、291)

(72) 「……。 なにしに問はせたまふぞ。もし、上官のうちにて、得させたまへるか」と問へば、 (枕草子、239)

補充疑問文を含む中古和文における事情疑問文全体の様相を今後の課題とする。

注

- 1 連体カ疑問文に地の文での「問い」の例が見られないのは、作者が読者に向かって言うことがないためである（岡崎正継1968）。また、地の文では反語の例も見られない。大鹿薫久（2007）が「連体ナリ」は発話者の知識である項を別の項に結びつけることで新たなコトを構成するコピュラであり、地の文の語り手は関与できない物語世界の事態を知識の項とできないために地の文に使用されないと論じているのを踏まえれば、反語の「A カ」は「非 A ナリ」を意味するために地の文に使用されないと言えて、不使用の背景にも連体ナリ文との対応を考えることができる。
- 2 「～ナリ」にヤが介在した「～ニヤ」の形があるが、「～ニヤアラム」のように助動詞を後接する例がほとんどである。助動詞を後接しない「～ナリ」に係助詞が介在しているのは次の2例のみで、「～ニヤ」全体から見ると極めて少ない。
 ・わかき童、このところの名を聞きて、羽根といふところは、鳥の羽のやうにやある」
 といふ。 (土佐日記、27)
 ・人のいとかたはなるものに言ひおとする容貌、はた、いとき言ふばかりにやはある、など思して、 (源氏物語・常夏、③241)
 また、「～ナレヤ」の形もあるが、和歌でしか用いられず、肯否疑問文にも補充疑問文にも用いられるなど、特殊な文型と考えられる。「～ナレヤ」を含む「已然形ヤ」については、すべてそこで切れるとする説（佐伯梅友1988）と、そこで切れるものと

文末に係るものがあるとする説（中村幸弘2014）がある。

・ 風吹けば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

（古今和歌集671、肯否疑問文）

・ 誰がために引きてさらせる布なれや世を経て見れどとる人もなき

（古今和歌集924、補充疑問文）

- 3 小柳智一（2002）は、二十一代集における連体ナリの意味として、「主語ハ述語ナリ」の構文を典型とする「事態確定」と、「句ハ句ナリ」および「原因理由句＋句ナリ」の構文を典型とする「事情確定」の二つを挙げている。「事態確定」は「直面した事態を単に知覚するのではなく、省察を経た上で、その確定性を認定」する表現、「事情確定」は「直面した事態が、ある事情（理由）のもとで成立したことを、確定的なこととして認定する」表現とされている。このうち「事態確定」が、田野村忠温（1990）の「実情」、野村剛史（2015）の「純然事情文」に相当すると思われる。

- 4 近藤要司（1998）には、次の例について、「問題となっている女性の身寄りが無いことを確認しているものであり、半ば事態の成立を問題にしているとも見られる。しかし、「あの女性には身寄りがない」という知識が話し手の気持ち（「この女性を自分のものとしたい」という下心がある）に大きく関係している場面であり、やはり知識の不適を問題にしている用例だと解釈できる」とある。

・（中將→妹尼）「……。尋ねきこえたまふべき人は、まことにものしたまはぬか。

……」

（源氏物語・手習、⑥353）

上の例と同様の解釈を（52）に適用すれば、傾向の例外にはならない。次の例も同様である。

・（源氏→僧都）「それ（＝大納言のむすめ）はとどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行く方の、なほたしかに知らまほしくて、問ひたまへば、

（源氏物語・若紫、①213）

- 5 （53）について、源氏物語の否定疑問文を調査している永田里美（2020）は、「否定事態の文脈を受けるわけではない」例外的な用例であると述べている。
- 6 事情文と考えるにくい用例がわずかに存する背景には、疑問文の通時的な変化が関わると思われる。今昔物語集の用例を中心に扱う岡崎正継（1996：第六章）は、連体カ疑問文の中に、「述語確認質問を」特徴とする「Vの型「—————ヤ」の領分を侵してゐると考へられるものも見られる」と述べている。また、磯部佳宏（2000）は、中古中期から中世前期にかけて、「～ヤ」が減少し、「～カ」が「問い」の表現として一般化したと述べている。
- 7 山口堯二（1990：221）は「後続句の事態との継起関係を表す」と述べている。また、辻本桜介（2023）は文相当句を承ける「とす」の用法を整理して、「～かとすれば」

が「「…するかと思うと間もなく」のような訳が可能。後件では前件の動きを妨げるような事態が描写される」という意味特徴を持つことを指摘している。

使用テキスト

国立国語研究所『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅰ 仮名文学』（バージョン2023.03）による。出典には『新編日本古典文学全集』のページ数（勅撰和歌集には歌番号）を示した。『新編日本古典文学全集』以外による場合は個別に断った。引用にあたって表記を改めた部分がある。

参考文献

- 磯部佳宏（1992）『『源氏物語』の要判定疑問表現：「一ニヤ。」形式を中心に』『日本文学研究』28
- 磯部佳宏（2000）『古代日本語の疑問表現（下）：要判定疑問表現の場合』『山口大学文学会志』50
- 大鹿薫久（2007）『「連体なり」の性格：源氏物語の文章を通して』『講座源氏物語研究 第八巻 源氏物語のことばと表現』おうふう
- 岡崎正継（1968）『疑・問の表現：今昔物語のや・か』『野州国文学』2
- 岡崎正継（1996）『国語助詞論攷』おうふう
- 小柳智一（2002）『和歌における活用語接続のナリ』『徳江元正退職記念 鎌倉室町文学論纂』三弥井書店
- 近藤要司（1998）『『源氏物語』の助詞カの文末用法について』『金蘭短期大学研究誌』29（引用は近藤要司（2019）による）
- 近藤要司（2001）『『源氏物語』のニヤについて』『親和国文』36
- 近藤要司（2019）『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院
- 佐伯梅友（1988）『古文読解のための文法』三省堂
- 鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 田島光平（1964）『「連体形承接の「なり」について：竹取物語を中心にして』『国語学』56
- 田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ：「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 辻本桜介（2023）『文相当句を承ける古代語の「とす」覚書』『日本文芸研究』74- 2
- 永田里美（2020）『『源氏物語』にみる不定疑問文の様相』『日本語と日本文学』66
- 中村幸弘（2014）『和歌構文論考』新典社
- 仁科明（2014）『「無色性」と「無標性」：万葉集運動動詞の基本形終止、再考』『日本語文法』

野村剛史（2015）「中古の連体ナリ：『源氏物語』を中心に」『国語国文』84- 1

山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院